

いづれも根の土を厚く廣く掘取一科を數人にて持ほど、大かぶにしてうゆれば、盛長せざる事なし、又菊と竹とは、根ながく上に向ひ出る物なれば、泥を多く添て、廻りよりおほふほどがさかゆる物なり、又云竹を種るに、一人してかぶをうゆれば、十年にしてさかへ、十人して持程のかぶは、一年にしてさかゆるものなり、又太き竹を好みても、かぶ小さければふとからず、小き竹にてもかぶをふとくして、月菴がいへるごとく、根の下に糞を多く入るれば、ほどなくさかへ、大竹となる物なり、又竹を引取事は籬を隔たる竹林の此方のかきねに、狸か猫を埋み置ば、明年筍多く出る物なり、又東家に竹を種れば、西家に土を種ると云事あり、たとへば隣に竹をうゆれば、一方の屋敷には、其とをりに土を置ば、隣の竹皆土の高き方に、うつるといへり、竹を伐事、三伏の中か、又七八月をよしとす、又臘月されば、虫喰ず、竹を伐に、三を留、四を去と云事あり、竹は七八年も過れば花を生じ、立枯する物なり、三年竹をば残し留めて、四年になるを伐べし、是竹林を生立そだつる定法、肝要の事なり、四年にならざるはかならずきるべからず、跡の竹甚いたみて、大き竹林も小さくなる物なり、又竹は山間の物は柔かにしてかたからず、平地の園林は竹老てつよしと云り、是間の竹は氣つよくさして其性はしかし、常の里なるべし、山のはつよ過るならん、是を桶ゆひにたづねとへば、山にしつれればりけるを云なるべし、山の氣ははらん、是を桶ゆひにたづねとへば、山の竹はねばりけ少なくはしかく、平林のはねばり氣ありてやはらかなりと云、竹の性春はうるほひありて枝葉に發し、夏は玄んにおさまり、冬は根に歸る、其故冬竹を伐ば、日數をへて後われさせて性強からず、夏はよけれども竹林痛む物なり、二つながら全き様にはならざるゆへ、七月末八月を中分とする事なり、又竹をうゆる時、枝を三四段をきて、末を節きはよりそぎ切て、さりたる節に水のたまらぬ様にすべし、竹皮などにて末を包みたるよし、されども多くうゆるには、なりがたき故かくはするなり、

〔齊民要術五〕種竹